
とある風紀の紅蓮皇帝《オーバーヒート》

白雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある風紀の紅蓮皇帝^{オーバーヒート}

【Nコード】

N7644W

【作者名】

白雲

【あらすじ】

学園都市の治安維持機関、《風紀委員》ジャッジメント。

その頂点である風紀委員長。

これはとある風紀

委員長が強大な事件に後輩たちと共に立ち向かっていく話である。

プロローグ（前書き）

色々とおかしな感じがしますがどうかよろしくお願いしますm
ー（

ブローグ

俺は昔から弱いものいじめが嫌いだった。

能力のある奴は自分を特別な奴だと思いこんで能力のない奴に暴力を振るう。

能力のない奴はそんな現実から目を背けるために自分よりも弱い奴に暴力を振るう。

そんな奴等が俺は大嫌いだった。

けれど昔の俺にはその暴力を止めることが出来なかった。

昔の俺にはそれだけの力がなかった。

そんな自分が嫌いだった。

だから頑張った。

とにかく頑張った。

頑張って頑張って頑張った。

そして俺は――

とある町の狭い路地裏、そこを2人の男が走っていた。

男1「ヒヒッ！まさかこんなに上手くいくとはなあ！」

片方の男はパンパンに膨れたリュックサックを背負っている。

男1「俺とお前の能力があれば銀行強盗くらいチヨロいもんよ！」

どうもこの2人はつい先程銀行強盗を働いてきたようだ。リュックサックの中身は大量の札束だろう。

男2「でもよ……すぐに警備員や風紀委員が追ってくるんじゃないか？」

男1「心配ねーよ。俺たちはレベル4の能力者だぜ？どんな奴が来たって撃退してやりやいいんだ」

男2「それもそうか。ハハハ……」

男達はお互いを見て笑いあった。

その時、

？「待て、その2人。」

前の方から男の声が聞こえてきた。

強盗2人は前を向く。

そこにいたのは1人の青年だった。

着ている服は普通の学生服だが、服の袖は和服のように長い。

長袖のジーンズをはき、ジーンズの上から右足のほうにだけ鎖を巻き付けている。

服装も異様だが一番異様なのは髪の色だった。

大半は普通の黒色なのだが右目にかかる部分だけが炎のような赤色をしている。

そんな異様な姿の青年を見た強盗は一瞬戸惑ったが、

男1「……何だてめえ」

強気な態度を崩さずに青年を睨み付けた。

青年は強盗達に右手を差し出した。《腕章》がよく見えるように。

？「ジャツジメント風紀委員だ。神妙にお縄につきな、銀行強盗さん？」

青年はニヒルな笑みを浮かべた。

男2「ちくしょう！もう来やがったか！」

男1「焦るなよ。相手は1人。すぐにねじ伏せればいいさ」

そう言っただけの男は左手を前に出した。

すると左手から火の玉が現れた。

男1「俺たちは2人ともレベル4の発火能力者なんだよ！燃やされたくなけりゃとつと失せやがれ！」

男は自信たつぷり、と言った様子で青年に言った。

自分の能力が強力であることからの余裕だろう。

？「へえ、レベル4か。そりゃすごい。」

青年は多少驚く仕種をしたが、すぐに強盗を見て、

？「けど俺もレベル4なんだよね。しかもパイロキネシスト」

それだけ言っただけで青年は右手に炎を纏わせた。

？「そろそろお喋りはやめにしようか。アンチスキルもそろそろ追いつくだろうし」

？「ただ、最後に1つだけ注意しておいてやろう」

？「俺に力を向けた以上――燃やされるのはお前らだ。」

――

男1「……ありえねえ」

いつから意識がなかったのだろうか。

男が目を覚ましたとき、そこは車の中だった。アンチスキルの使用する護送車だ。

男とまだ意識のない相棒の手にはしっかりと手錠がかけられている。

男1「そうだ……俺たちはあの風紀委員のガキにやられて……。」
ジャッジメント

男はどうか気絶する前のことを思い出そうとする。だがそこに

？「じゃあ後はお願ひします。」

車の外からさっきの青年の声が聞こえてきた。

男はすかさず車に耳を当て声を聞いた。

？「おう、お前もご苦労だったじゃん」

もう1人女の声が聞こえてきた。恐らくアンチスキルだろう。

？「しかし相変わらず凄い威力じゃん。新たなレベル5になる日も近いんじゃないか？」

？「かもですね。まあ期待せずに待ってみますよ」

どうやらさっきの青年は相当の能力者らしい。新たなレベル5になる日も近い……それほど言えるのなら同じレベル4の自分たちが負けたのも納得だ。

……待てよ。ジャッジメント風紀委員で、レベル4の発火能力、レベル5に匹敵する力……。

1人だけ思い付いた。その条件に当てはまる奴が。

もし俺の推測が正しければ、俺たちはとんでもない奴に勝負を挑んだことになる。

そして次に聞こえた会話で……俺の推測は確信に変わる。

？「多分あの2人そろそろ起きてますよ」

？「なんでそんなことわかるんじゃない？」

？「勘ですよ。しょっちゅうあの手の輩を相手にしてるとなんとなくね」

？「はっ！さすが、言うことが違うじゃん」

？「そりゃあね、これでも《風紀委員長》ですから」

さて、これでプロローグはおしまい。

ジャッジメントこれが風紀委員の頂点……《風紀委員長》であり、レベル4紅蓮皇オーバーヒート帝と呼ばれる男の物語の始まりである。

プロローグ（後書き）

基本的に自分には文才がないので、グダグダな感じになるかもしれませんが、それでもよければどうかお願い致します。

第1話 風紀委員長（前書き）

第1話からいきなりゴチャゴチャな展開になった？

文才が欲しい……？

第1話 風紀委員長

とあるビルの一室……

そこに2人の人影があつた。

1人は大量の書類を一枚一枚手に取り、目を通してから判子を押し
ていく。

もう1人は竹刀を持ち、床に座り座禅を組んでいる。ピクリとも動
かない。

？「……葵」

書類処理をしていた男がもう1人に呼びかける。

葵「……」

？「……冬空葵？」

葵「……」

？「あゝおい？」

葵「……うるさい。座禅中に話しかけるな」

執拗に名を呼ばれた女性……ふゆらあおい冬空葵は、男を睨み付けた。
？「座禅なんかしてないでさ、こっち手伝ってくんない？見るよこ
の書類の山」男は山のように積まれた書類を指さす。

葵「それは風紀委員に対する苦情や意見だろ？それは私の判断でどうこうできるものじゃない。風紀委員長であるお前がちゃんと見る」

葵は男に冷たく言い放つ。

？「んだよ、名字の通り冷たい事を言うんじゃないよ、切なくなるだろ」

葵「そんなこと言ってる暇があるならさっさとその書類を片付けたらどうだ？そんなペースだと残業確定だぞ？」

？「……それは嫌だな……仕方ない。パッパと終わらせますか」

そう言つて男は再び書類処理を始める。

葵もまた目を閉じて座禅を再開するのであった。

その後しばらく男が作業を続けていると、

♪♪

携帯が鳴り始めた。男はすぐに画面を見る。

？「透堂から？あいつ今日は休みの筈だが」

男は疑問に持つが携帯に出る。

透堂「あつ、もしもし、委員長すか？」

？「透堂、なんの用だ？ただの冷やかしだったらオメー許さんぞ？」

透堂「いやいや、ちゃんと用事がありますって」

透堂と呼ばれた男は語りだす。

透堂「あのですね、ちょっと今怪しい三人組を発見しまして」

？「怪しい三人組？」

透堂「はい、なんかいかにも銀行強盗企んでそうな……。それで一応能力使って尾行してるんですけど、これからどうしたらいいですね？」

透堂の質問に男は多少迷う素振りを見せたがすぐに

？「とりあえずそのまま尾行しとけ。それと現在地逐一連絡しろ。今から俺もそっち行くから」

そう言った。

透堂「はあ……わかりました。じゃあこのまま尾行してますんで、早く来てくださいね」

そして透堂との連絡は切れた。

？「葵、ちょっと行ってくるわ。留守番頼むな」

葵「まだ書類片付いてないのに出掛けるのか？」

葵はそう言ったが、実質ほとんどの書類は片付いていた。山は最初の十分の一くらいしかない。

？「このぐらいなら帰ってきてからでも間に合うさ。だから行ってくる」

葵「そうか、じゃあいつてらっしゃい」

葵は男に対して笑みを浮かべる。それに対して男も

？「おう、いつてきます」

笑みを返すのであった。

一方そのころ……

？「お姉さまっ！さあさあ、遠慮なさらずに、さあっ！」

ツインテールの娘……白井黒子（しらいぐろこ）がお姉さま……御坂美琴（みさかみこと）に先ほど購入した自分のクレープを差し出していた。

御坂「いらないうって言うてるでしょ！なによ生クリームと納豆のトッピングって！」

御坂は必死に拒絶している。確かに納豆と生クリームのコラボは非

常にいただけない。

黒子「一度食べれば病みつきになりますの！騙されたと思って、さあ！」

黒子はしつこくクレープを差し出してくる。だがそこには別の目的があるようで、

黒子「これでお姉さまがクレープを食べれば、お姉さまと間接キスが……ぐふふ……」

黒子は自分の本心がただ漏れなのに気づいていない。もちろんそれを聞いていた御坂は、

御坂「ふーん……そんな魂胆があったわけ……」

黒子に問いかける。その表情は笑っているが、目は全く笑っていない。

黒子「はっ！ち、違いますのお姉さま、今は、その……」

御坂「問答無用！」

御坂は黒子の両頬を掴みそれを思いきり左右に引っ張る。

黒子「いひゃい！いひゃいでしゅのお姉ひゃまあ！」

黒子は涙目になりながら御坂に訴える。

しかし御坂は変わらずに黒子の頬を引っ張り続ける。

？「仲良しなんですね。あの2人」

？「初春、あれをどう見たらそんなセリフが出るの？」

そんな2人を近くのベンチでクレープをほおばりながら見ている人物が2人。

1人は初春ういはるかざり飾利。頭の上の活け花？がポイントである。

もう1人は佐天涙子。先程の初春の見当違いの発言に対してジト目で初春を見ている。

初春「でもよかったですね、佐天さん」

いきなり話の方向を変えてきた初春。だが佐天は一瞬なにがよかったのかわからなかった。

佐天「えっ……なにが？」

初春「御坂さんですよ。お嬢様のイメージとはちょっと違ってたけど、とっても親しみやすくて」

佐天「んっ……どうなんだろうね……」

佐天は御坂に会う前、レベル5の人間の事を「能力をかさにきて周りの人を見下すいけすかない奴」だと思っていた。
だから御坂をいまいち信用しきれないのである。

現在御坂はリアルタイムで後輩の頬をつねっているわけだし。（後輩が原因なわけだが）

佐天「あの光景見るとどうもね……」

初春「あはは……」

初春は苦笑いを浮かべた。

だが佐天に視線を向けたとき、佐天の先に見覚えのある人影を見つけた。

初春「……あれ？　すみません白井さん」

黒子「なんでしゅの初ひやる？」

初春「あれって透堂先輩じゃないですか？」

初春に言われて黒子も見してみる。

そこには銀行に入ろうとしている黒い制服を着た1人の青年の姿があった。

御坂「……誰？」

御坂も視線を向けていたようだ。この時手の力が緩んだのか、ようやく黒子の頬が解放された。

黒子「あら本当、透堂先輩ですの」

黒子は頬をさすりながら言う。

佐天「初春、誰なのあの人」

初春「ジャッジメント風紀委員の先輩ですよ、佐天さん」

初春の説明に黒子がさらに付け足す。

黒子「風紀委員本部所属、透堂ジャッジメント三先輩ですの」

佐天「へえ、本部所属！なんか凄そう！」

佐天のテンションが上がり、今にもピョンピョン跳びはねそうだ。

初春「別にそんなに凄くはありませんよ。やってることも私たちと変わりませんし」

佐天をなだめるように初春が話す。

御坂「じゃあ何でわざわざ本部なんて仰々しく言ってるのよ」

黒子「そりゃあ委員長がいるからですの」

黒子は手元のクレープを頬張りながら話す。

御坂「委員長？」

黒子「そうですの、風紀委員の頂点、風紀委員長ですの」ジャッジメント

佐天「あの、やっぱり風紀委員長ってクールな人なんですか？こう書類持って眼鏡かけて……」

佐天の委員長のイメージはそんな人間のようなようだ。
そんな目を輝かせる佐天に対し黒子は

黒子「クール？とんでもない、その真逆ですの。すぐ怒りますし、服装はだらしないですし、外見だけ見ればスキルアウトと間違われてもおかしくないですの」

？「ふーん」

今相づちをうつたのは御坂でも初春でも佐天でもないのだが黒子は気づいていない。

黒子「委員長は外見ばかり立派で中身が伴ってないですの。別に仕事ができないわけではないのですが、やはり精神年齢が子供ですの。まあ言ってしまうえばお子さま、なんですの……」

御坂「黒子、後ろ」

黒子「はい？後ろ？なにかありますのお姉さ……」

そこまで言って黒子は固まった。

？「白井……お前俺のことお子さまとか思ってたんだ……ふうん……」

黒子「い、い、い……委員長おお！？」

黒子は委員長が後ろから現れたことにめちゃくちゃ驚いていた。ちなみに委員長はすごく黒い笑みを浮かべている。確実になにか企んでいる顔だ。

？「そおんな事考えてるのはこの頭かあ？んん？」

黒子の頭をガツシリ掴みアイアンクローを決める。

黒子「痛だだだ！お辞めください、委員長あゝ！」

黒子の体は宙にぶら下げられ、抵抗ができない。
しかも痛みあまり演算できない。

？「つたく」

手を離すと黒子はなにかするまでもなく、地面に落ちた。頭を抱えて悶絶している。

御坂「えーっと……何？この状況……」

佐天「さ、さあ……」

状況についていけず呆然としている御坂と佐天。

初春「こんにちは、委員長」

？「はい、こんにちは初春」

初春は慣れているようで特に気にすることもなく委員長に挨拶した。

？「……ん？そっちの2人は友達？」

初春「はい、そうです」

？「ふーん」

委員長は御坂と佐天に近づくと手を差し出してきた。

？「はじめまして。風紀委員長、紅羽あかはねえんじゅ炎樹です」

委員長……紅羽はニツコリと笑った。

紅羽「よろしくね」

第1話 風紀委員長（後書き）

次回は銀行強盗撃退の話です。バトルパートは苦手ですが頑張ります？

第2話 レベル4 紅蓮皇帝へオーバーヒート

黒子「……それで？どうして委員長が持ち場を放り出してこんな所にいますのでしょうか？」

アイアンクローをくらった頭をさすりながら黒子が問う。さっきも頬をつねられたり散々な扱いである。

紅羽「持ち場は葵に任せてあるから問題ない。それに暇にあかせてここにいるわけでもないぞ」

黒子「ではどういう訳か教えてくださいな」

詰め寄る黒子を片手で押さえながら紅羽は話す。

紅羽「その関係でさ。お前らこの辺で透堂見なかったか？」

初春「ああ、透堂先輩ならさっきその銀行に……あれ？」

銀行の方を向いた初春は首をかしげる。さっきまで開いていた銀行のシャッターが閉まっていたのだ。いくらなんでもまだ早すぎる時間帯だ。

佐天「あれ？さっきまであの銀行開いてなかったっけ？」

初春「ですよ……なんで閉まってるんでしょうか？」

紅羽「あ……これは予感的中ってやつか？」

紅羽は額に左手をあて、呟いた。その呟きを聞いていた御坂が、

御坂「なに？予感ってどういう事？」

と詰め寄ってくる。

紅羽「まあかいつまんで言うとな……」

紅羽は話した。透堂からの電話の内容を。

黒子「……とすると、その怪しい三人組は本当に銀行強盗を企てていて」

佐天「今まさに銀行で行動しているって事なんですか？」

紅羽「ま、その可能性が一番高いだろ」

紅羽の言葉に初春が焦りだす。

初春「そんな落ち着いてる場合ですか！？急いで何か対策をたてないと……」

紅羽「こんな時だから落ち着くんだよ、初春。変にテンパってると守れるものも守れなくなるぞ」

そう言われて初春も多少落ち着きを取り戻す。

初春「そ、そうですね。すみません」

初春が落ち着いたのを確認し、紅羽はさらに言う。

紅羽「出来れば犯人が外に出てくる前にケリをつけたいな」

紅羽の言葉に佐天が疑問を持つ。

佐天「どうしてですか？」

紅羽「周り。よく見てみな」

佐天「周り？……あつ」

周りを見回してみても佐天は気づいた。周りには社会研究かなにか、大勢の子供達がいたのだ。

紅羽「せっかくの楽しい学園都市見学。台無しにするわけにもいかないだろ」

御坂「へえ……結構色々考えてるのね」

紅羽の判断に御坂を含め四人は感心するばかりだった。

紅羽「初春。透堂は本当にあの銀行に入ってたのか？」

初春「はい、それは間違いないと思います」

紅羽「……白井。お前の瞬間移動で銀行の中に入れるか？」

レポート

黒子「無論ですの」

紅羽は少し考えた後、黒子と初春に指示を出した。

紅羽「白井、お前は瞬間移動テレポートで銀行内に入り透堂と協力して犯人の相手をしろ。ただし圧倒しすぎるなよ。切羽詰まった奴はなにをしでかすかわからん」

黒子「つまり互角の戦いを演じろ、と？」

紅羽「そうだ。最優先事項は銀行内の人達の安全の確保だ」

テキパキと指示を出していく紅羽。さすがは風紀委員長、と言ったところだろうか。

紅羽「その間に俺と初春で子供達を避難させておく。避難がすんだらシャッターをおもいつき叩く。そしたらすぐに犯人を確保しろ」

黒子「了解しましたの」

言うやいなや黒子はすぐに消えてしまった。瞬間移動テレポートで銀行内に入ったのだらう。

紅羽「いくぞ、初春。迅速に避難させろ」

初春「はいっ！」

2人もすぐに仕事に取りかかった。が、紅羽がすぐに振り向いておいてけぼりの御坂と佐天に一言だけ言った。

紅羽「お前たちも避難しとけ。巻き込まれても知らねーぞ」

それだけ言って紅羽はさっさと行ってしまった。

佐天「……え〜っと……とりあえず言われたとおり避難します?」

御坂「え?ん?……大丈夫でしょ。外での捕り物にはならないみたいだし」

御坂はそれらしい事を言うが、実は紅羽の結構な命令口調に対するちよつとしたプライドの反抗心だったりする。

御坂「それにいざとなったら私が佐天さんを守ってあげるから♪」

御坂は笑顔で佐天に言った。もちろんこの言葉に悪意など微塵もないだろう。

佐天「えっ……あ、ありがとうございます……」

だが御坂は知らない。その言葉を聞いた佐天の顔がわずかに曇ったことを。

佐天（守ってあげる、か……）

所変わって銀行内。

透堂（……委員長、早く来てくれないかな……）

透堂はそんな事を考えながら自分の尾行していた銀行強盗（確定）を見ていた。

今透堂は縄で縛られたりしていない。かといって銃を人質に向けられて脅されているわけではない。

言ってしまうえば、銀行強盗には透堂が見えていないのだ。

透堂は自信の能力、『色素脱色』『クリアリング』を発動しているからだ。

この能力は一言で言うと、透明人間になる、と言う至ってシンプルな能力だ。

詳しく説明すれば長くなるので割愛しよう。

透堂（相手は3人。迂闊に攻撃してもすぐに制圧できるわけじゃないし……）

透堂の能力は奇襲や混乱時には最適だ。だが今の状況ではあまり意味を成さない。さらに、

透堂（下手に攻撃して一般人に手を出されても困るしなあ）

何より避けたいのは、透堂による攻撃が、巻き込まれた一般人の能力だと思われることだ。

そんな理由で透堂は迂闊に手が出せない状況にいた。

透堂（委員長、いや、この際誰でもいいから助太刀してくれ）

神にでも願うかのように透堂は天を仰ぎ見た。まあ天といっても天井だが。

だがそんな透堂の願いが通じたのか。

天女（黒子）が舞い降りた。

強盗A「なっ、なんだあ!？」

いきなりの黒子の登場に強盗も驚いた。

黒子「ジャッジメント風紀委員ですの!銀行強盗の現行犯で拘束いたしますの!」

黒子は右腕の腕章が見えるように右腕を体の前に出す。それを見た強盗達は多少たじろいだ。

強盗A「ジャッジメント風紀委員!?!いくらなんでも早すぎねーか!？」

強盗B「ちくしょう!なんでこんなに早くばれたんだ!？」

強盗C「落ちつけ!こんなガキ一人どうってことはねーだろ!」

最後の一人の言葉を聞いた黒子は少し不機嫌になり、

黒子「そういう三下の台詞は死亡フラグですわよ?言葉には気をつけなさい」

そう強盗に言った。本当はすぐにでも蹴りかかってやりたかったが、紅羽の言葉があるので迂闊には手を出さない。

強盗C「……ケツ！偉そうなこと言ってんじゃねーよガキが！」

強盗が持っていた銃を向ける。

ただし黒子にはない。一般人にだ。

黒子「……っ！」

強盗C「ほら、テレポートでも何でもやってみろよ！その前に俺の銃が火を吹くけどなあ！」

完全に勝ち誇ったように強盗が黒子を挑発する。

黒子ならテレポートを駆使して銃を破壊することもできるが、失敗した時のリスクを考えるとおいそれと手は出せない。

強盗C「ぎやははは！ほらどうしたよ！かかってこいよ、ジャッジメント風紀委員さんよお！」

黒子は何も出来ない事をわかっているからか、強盗はすっかり油断しきっていた。隙をつけば簡単に倒せるくらいに。

透堂「じゃあお言葉に甘えて」

強盗C「は？」

強盗がその声に気づいた頃にはもう遅い。

透堂は強盗達が黒子に釘付けになっている間にこっそりと強盗達の近くに移動していたのだ。

ポカンとしている強盗の顔面に全力の左ストレートをくらわした。強盗は防御もできず、もろにストレートをくらい吹っ飛ばされた。

その際銃も放してしまった。

強盗A「なっ、なんだあ!?!」

強盗B「一体なにが起こりやがった!?!」

ストレートをくらった強盗はそのまま気絶し、残り二人の強盗は慌てふためいた。

透堂「こっちですよ、こっち」

強盗達は声のした方向を向く。
そこには誰もいなかった。だが少しずつ人の姿が見え始めた。そして数秒で一人の人間が現れた。

透堂「ジャッジメント風紀委員です。おとなしくしててください」

『色素脱色』《クリアリング》を解いた透堂は黒子と同じように右腕の腕章を強盗に見せる。

強盗A「ぐうっ……ちくしょう!」

強盗の一人が右手をつき出す。
すると男の手から炎が現れ、それは火の玉となった。

透堂「こいつ……バイロキネシスト発火能力者か」

黒子「あの規模なら……レベルは3、といったところでしょうか」

二人は火の玉を出されても冷静に分析する。少しは驚いたりするも

のだろうが、二人とも能力を向けられるのは慣れているのだ。

一方、火の玉を出して武器を確保できた強盗ではあるが、その頭の中は未だに混乱していた。

強盗A（どいつを攻撃すればいいんだ！？ツインテールのガキか！？カメレオンもどきの奴か！？それとも従業員か！？）

誰に狙いを向けても捕まる。従業員を攻撃すれば二人がかりの制裁が待っている。かといって風紀委員ジャッジメントを攻撃しても避けられる可能性が高い。

強盗A（どうすればいい……どうやってこの場を逃れれば……）

そこまで考えてふと強盗は気づいた。

強盗A（……そうだ。もう金はバッグに詰め込んだ後なんだ。だったら風紀委員ジャッジメントなんか相手にする必要……）

強盗A「ねーじゃねーかよ！」

そう言つて強盗は火の玉を構える。

それを見た黒子と透堂も身構えた。

だが二人とも火の玉を避ける自信はあつたし、従業員が狙われた場合は最悪自分を盾にしかばつつもりだった。

だが火の玉は黒子にも透堂にも従業員にも向けられなかった。

その火の玉は――閉じられたシャッターへとぶつけられた。

視点は変わって銀行外。

紅羽「……よし。こっちは避難し終わったな。初春、そっちはどうだ？」

初春「こっちも無事避難完了しました」

二人はあの後二手に分かれて避難誘導にあたった。そのおかげで避難は比較的早く終わったようだ。

紅羽「初春、お前に出来ることはここまでだ。少し離れとけ」

初春は少しうつむいたが

初春「……はい、わかりました」

それだけ答えた。本当は自分も戦いたかったが、自分はバックアップが専門で何の力も持たない。

仕方ないのだ、初春はそう自分に言い聞かせた。

佐天「おゝい、初春」

ふと、自分と呼ぶ声がしたのでそっちを向いてみると佐天がこっち

に手を振っていた。

初春「って佐天さん！？何で避難してないんですか！？」

佐天「いやゝ私は逃げようって言ったんだけどね？御坂さんがさゝ」

初春「御坂さんのせいにしないでください！ほらっ早く逃げてください！」

初春は佐天の腕を引っ張り、避難を促す。

御坂「大丈夫よ、初春さん。佐天さんは私が責任をもって守るから。もちろん初春さんもね」

佐天「ほら、御坂さんもこう言ってくれてるし」

初春「……はあ、わかりました。そのかわり危険な事はしないでくださいね」

御坂の口添えもあつて初春は渋々了承した。

御坂「ところで初春さん、聞きたいことがあるんだけど」

初春「はい、なんでしょうか？」

御坂「あの委員長って強いのか？」

初春は御坂からそんな質問が来るとは思っていなかったのか、

初春「え？委員長……ですか？」

と聞き返した。

御坂「そう。やっぱり委員長って言うからにはすごい強かったりするの?」

初春「……そうですね。少なくとも負けたところを見たことはありませんね」

初春がそこまで言うのと佐天が口を挟んできた。

佐天「ねえ、じゃあ紅羽さんの能力ってどんなの?」

初春「委員長はですね、レベル4の……」

初春がちよつといいかけたその時

辺りに轟音が響いた。

三人はすぐに轟音のした方向を振り向く。

見るとそこにはさっきの銀行があつた。

シャッターは吹き飛び銀行内からは煙が出ていた。

その光景から何かが爆発したのだとわかる。

初春「そんな!どうして爆発なんて!?!」

御坂「多分……強盗の中に能力者がいたのね」

慌てる初春と冷静に分析する御坂。佐天は真つ青になっている。

佐天「ねえ……紅羽さんは？さっきまであの近くにいたはずなんだよね？」

佐天の言葉に御坂はハツとした。

もしあんな爆発に巻き込まれれば只ではすまない。

能力で防げれば問題ないがそうでなければ大惨事だ。

御坂「大丈夫よね、あの委員長……」

ー銀行内ー

黒子「くっ、あの男直接シャッターに攻撃するとは！」

透堂「くそっ、煙で周りが見えねえ」

強盗A（よし、この混乱に乗じれば上手く逃げられるぜ）

強盗の発火能力によってシャッターを爆破、それにより煙が出て視界を奪っているのだ。

強盗A（おら、今のうちにずらかるぞ。さっさと金持て）

強盗B（了解つと）

片方の強盗が金を持って脱出しようとする。

相手には瞬間移動能力者がいるが、相手の目の届かない所に逃げてしまえば問題ない。

これで俺たちの勝ち。そう確信した。

相手が二人だけだったなら。

次の瞬間、いきなり強盗Bの顔面にハイキックが炸裂した。

強盗Bは二メートルほど後ろに吹き飛ばされ、そのまま柱に激突した。

ピクピクと痙攣し、白目になっているので気絶したのだろう。

紅羽「ったく。いきなりシャッター爆破するとか勘弁してくれよ。

周りに一般人がいたらどうする気だったんだ」

そのハイキックを放った本人――紅羽炎樹は不機嫌な表情で立っていた。

爆発に巻き込まれたにも関わらず、ダメージがあるようには思えない。

強盗A「なっ……そんな馬鹿な……」

強盗Aの頭には驚愕しかなかった。
自分は確かに全力で能力を使った。
並の人間なら軽く吹っ飛ばせる破壊力のはずだ。
なのに目の前のこの男は大怪我どころか火傷一つない。

そんな混乱している強盗Aに紅羽はとどめの一言を放つ。

紅羽「もう逃げ場はねーよ。観念しろ」その一言が、引き金になったのか、

強盗A「ちくしょうがああああ!!」

強盗Aが再び火の玉を作り紅羽にぶつけようとする。

強盗A（俺はレベル3の発火能力者だぞ！それをくらって無傷な筈がねえ！）

火の玉を振り上げる強盗Aに対して紅羽は何のアクションも起こさない。

対抗しようとも避けようともしない。
ただ突っ立っているだけである。

紅羽「お前さあ、一つだけ言っておくぞ」

紅羽は動かない。火の玉が自分に向けて発射されても、それでも紅羽は動こうとしない。

紅羽「俺を相手にそれで戦うのは、愚の骨頂だ」

瞬間。火の玉が一瞬で霧散した。

無論、強盗Aが能力を解除したわけではない。
現に一番驚いているのは強盗Aだ。

強盗A「なっ……なんで……」

強盗Aは再び火の玉を作る。
だが今度は作った瞬間すぐに霧散してしまった。

強盗A「なんでっ！なんで消えちまうんだよ!？」

何度火の玉を作っても、すぐに消えてしまう。
自分の意思とは関係無しに。

紅羽「お前、レベルは3つてところか？」

紅羽が強盗Aに歩み寄って行く。

紅羽「それだけの力があるなら他に出来ることだってあつた筈だろ」

一歩ずつ、強盗Aに近づいていく。

紅羽「なのになんでこんなことやってんだよ。なんでこんなことしか出来なかったんだよ」

紅羽の言葉に怒気が含まれていく。

強盗Aは足がすくんで動くことができない。

紅羽「力の使い方を間違えんな。こんなことよりも真っ当な力の使い方はいくらでもあんだろーが!」

本気で怒りながらさらに近づいてくる。

強盗Aは後ずさるうとするが、足が言う通りに動いてくれない。結果、紅羽はあつという間に強盗Aの目の前にたどり着いた。

紅羽「お前たちは、まだやり直せる。俺なんかと違って、まだやり直せるんだから」

紅羽はそう言つて拳を握りしめ、そして振り上げる。

強盗A「ひっ……」

紅羽「だからもう一度、一からやり直してこい！」

バギイツ！と、鈍い音が響き渡った。

殴られた強盗Aは後方に吹き飛び、壁に叩きつけられそのまま意識を失った。

紅羽は強盗達が全員倒れているのを確認すると、

紅羽「白井、透堂、こいつら縛るの手伝ってくれ」

袖から長めの縄を取りだしのびている強盗達を縛り始めた。

黒子「……いつも思つのですが、委員長的能力は、一体どういう原理なんですか？」

紅羽「さあ？」

質問しながらも紅羽から縄を受けとる黒子に対し紅羽はそうあっさり答えるだけだった。

黒子「さあつて、ご自身の能力でしょう？そんな適当な……」

紅羽「いいんだよ別に……よし、出来た」

白井と話している間に強盗達を縛り終える。
あとは警備員アンチスキルの到着を待つだけだが

紅羽「じゃあ白井、透堂。あとは任せた」

黒子・透堂「はい？」

紅羽のこの発言にはさすがに驚くしかなかった。

紅羽「いやさ、俺今日中に目え通さなきゃならない書類が山ほどあるんだよ」

透堂「いやいやいや！それでも最後まで責任持って警備員アンチスキルを待つのが普通でしょうが！」

紅羽「そこを頼むよ。警備員アンチスキルや統括理事会とかに廻さなきゃならないやつもあるから」

体の前で手のひらを合わせて頼み込む紅羽。

透堂「……はいはい。わかりましたよ。こっちは引き受けます。白井もそれでいいか？」

黒子「まあ……仕事をサボっているわけではないですし、構いませんの」

二人も渋々ながら承諾した。

それを聞くと紅羽の表情が一層明るくなり、

紅羽「悪いな。今度どこかで埋め合わせするから」

それだけ言つとすぐに銀行を出ていつてしまった。

黒子「いつもながらフットワークの軽い人ですね」

透堂「昔っからすぐ行動する人だったからな」

残された二人は確認するように呟いた。

第2話 レベル4 紅蓮皇帝へオーバーヒート（後書き）

御坂や佐天の見せ場ごっそりカット？

もうちよっとな原作キャラも活躍できるように頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7644w/>

とある風紀の紅蓮皇帝《オーバーヒート》

2011年12月27日22時55分発行